

## 六 往生成就の證據

物事を説明するにも證明するにも、道理と證據が明確でなくてはならぬ。如何に道理理窟は立つても、證據が出せなかつたなら、議論は議論で終つて了ひ、空論になつて仕舞ふ。而してその證據も亦篤と吟味しなくてはならぬ。一向證據にならぬものを、證據のやうに心得て居るのは、恰も遣りつ放しの行をして、最早始末はついた風の心地で居ると、同様である。焉ぞ知らん、問題はいつまでも問題である。

當流に於て、たのむは、たのめよの命に應じたので、信じたのは任せたのであり、任せたのは救はれたのである。「信心すなはち一心なり、一心すなはち金剛心、金剛心は菩提心、この心すなはち他力なり」。言こそかはれ、實體は同じ事である。これについて廻つてはならぬ。

母親が、娘に向つて「汝は今年二十にもなつて、糠袋一つ縫ふことも出来ぬとは、何たる迂怪に生れたものぞ」と叱れば、隣の女房そこに居合せて、「否、このお娘さんは、まだ二十とはなりません、ハタチの筈です」と云ふに、母親は頭を掉つて「貴女は何を間違へて、其の様な事を云ひます。現在の我が子の年を忘るゝ程、妾はまだ耄碌しませぬ。ハタチではない二十です。それに相違ありません。」「いや二十ではないハタチです。」「イヤ二十です。」「ハタチです」。互に負けず劣らず云ひ争つて居る處へ、やつて来た近所の婆さん、仔細を聞いて「何れも御尤も。このお娘の生れた年なら、妾のところ、何より確かな證據がある。持つて来て見せませう。何もそんなに争ふには及ばぬこと」。やがて携へ來つたのは一古瓢箪「これこの瓢箪が生つた年に、このお娘が生れたので、妾が能く覚えてゐる。何より確かな證據でありませう。」「へい、それでは、その瓢箪は何年経つてますか。」「そ、それは

わす  
忘れて仕舞ひました」。

二十かハタチか、ハタチか二十か。二十と云ふも得たり、ハタチと云ふも得たり。誓願不思議を信ずると云ふも得たり、名號不思議を信ずると云ふも得たり、たのむと云ふも得たり、すぐると云ふも得たり。信ずるはまかす、まかすは安堵する。信じ任すその根本は、如來の御慈悲の外にない。「何年經ちました。それは忘れて仕舞ひました」一向證據にならないではないか。そんな證據では全くたよりない。今我々の往生には、どんな證據があるか。名號六字の證文に、彼尊の正覺を抵當に、六方恆沙の諸佛の證人がついてある。如何にも確かな證據ではないか。「かるがゆるゑに、念佛の行者、名號をきかばあははやわが往生は成就しにけり。十方衆生往生成就せずば、正覺とらじとちかひたまひし、法藏菩薩の正覺の果名なるがゆるゑにとおもふべし」。『安心決定鈔』名號の出來上つたのが即ち衆生往生の成就した證據である。故に「われらすでに阿彌陀といふ名號をきく、知るべし、われらが往生すでに成ぜりといふことを」出來上つた名號が何よりの證據である。